

齊藤 学（言語学）

自然言語の証拠推量表現と知識管理

本論文は、日本語の助動詞ヨウダとラシイの意味と用法を詳細に分析した上で、理論言語学と認知心理学の両方を視野に入れた意味理解のモデルを提示し、その中に、証拠推量という言語普遍的な行為を位置づけたものである。

本論文の主な主張は、概略、次の3点にまとめられる。

1. 基本的に、「P ヨウダ」という文の意味は「P の必要条件」を表し、「P ラシイ」という文の意味は「P の十分条件」を表すということ
2. 「ヨウダ」にも「ラシイ」にも、推量以外の様々な用法があるが、一見異なる意味に見えるそれらの用法も、1. に示した基本的な意味から派生させることができるということ
3. 証拠推量とは、直接体験によって得た知識(命題)を知識データベースに取り込む際、知識の最適化を目指して行われる推論であると特徴づけられるということ

本論文では、この3つの主張がきわめて実証的かつ具体的に提示され、説得的な議論が展開された。

ヨウダやラシイの用法について考察している先行文献は多々あるが、それらの多くが、単に用法を列挙しているに等しく、上の1. や2. のような視点からの考察はほとんどなかった。また、「証拠推量」という用語そのものは従来の研究でもしばしば言及されてきたものであるが、「そもそも、証拠推量をするということは、どういうことか」という本質的な問題に迫ろうとしているという点でも、本論文は他の先行研究と一線を画している。このような方向性をもった研究としては、田窪行則氏（学外審査委員）の一連の研究が先駆的であるが、本論文は、あえて射程をヨウダとラシイに限ることによって、その考え方をより明示的なシステムとして具体化し、今後の発展・応用を可能にしたという点で大きな貢献がある。

本論文では、言語の意味というものを、外部情報の知識内への取り込みという観点から捉えることによって、真偽判断に基礎を置く従来の意味論では見過ごされていた数々の現象に統一的な説明を与えることができることが示された。文の生成機構としての文法とその理解の関連をより明示的にし、新しい情報を知識の中に組み入れていくプロセスを具体的に示すことによって、今後、この分野の研究の検証可能性がより高まることが期待される。

よって、本調査委員会は、本論文の提出者が、博士（文学）の学位を授与されるに十分であることを認める。